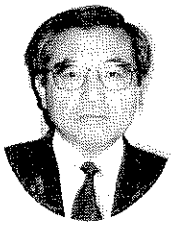
巻　頭　言

これからが正念場



澤　田　嗣　郎

先日，ある国立研究所の計測解析研究センターの公開の日に見学させていただく機会を得た。すばらしい表面分析機器が数多く設置され，見学者の目を奪った。表面分析機器の占める割合の多さにその重要性を改めて認識させられることとなった。このようなハイテク分析機器の進歩の速さには正直驚かされたが，特に情報の画像化とデータ処理技術の高度化にはすばらしいものがある。

好景気が続いていた時代は，このようなすばらしい計測解析センターは企業の独壇場であったが，バブル崩壊後の不景気が異常に長く続く状況の中で，政府の不況対策によって大学をはじめ国公立研究所は思わぬ“干天の慈雨”の恩恵に浴することとなった。

表面科学の最先端の研究は，もちろん分野によってそれぞれ事情も異なろうが，高度な解析技術を駆使しなければ勝負にならないことは，数多くの研究者の認めるところであり，特に大学の研究者達の多くは，そのような解析設備の不備が研究の足を引っ張っていることを歯がゆく思っていたはずである。しかし事情は一変した。全国レベルで見ても，少なくとも主要な大学，国公立研究所は程度の差はあるにせよ，とりあえず必要最小限の分析機器は整備されたのではないだろうか。

表面は，高度な真空技術や解析技術を駆使して初めて見えるものと，もともとあるがままの表面を見なければ表面科学にならないなどそれぞれ分野により表面のとらえ方に立場の違いがある。それだけに，革新的ないろいろな表面分析機器の開発は表面科学の重要課題である。

日本表面科学会は設立 15 年を迎えるが，表面科学を基盤とする研究者の集団であり，情報交換のわが国唯一の場である。がしかし現実は寄り合い世帯であって，異分野間の融合化はあまりない。優れた人材が，縦割り研究分野の中で育てられた必然の結果であるとしても，何とかならないものだろうか。いずれにせよ真の表面科学が健全に日本に育まれてきたかどうか，その真価はまさにこれから明らかになろうとしているのではあるまいか。先に述べた研究設備などは現状では満足できるものではないが，しだいに改善されつつある。これからが正念場である。いうまでもなく，学問は優れた頭脳を有するもの，また研究に没頭できる集中力をもった人々によって発展する。表面科学はまだ未開拓の魅力を秘めた若い分野であり，若き学徒の才器に負うところ大である。独創的でかつ衝撃的な研究成果がわが国の研究機関から，日本人の手によって発信されることを期待したい。

（東京大学工学部）